



TITLE:

巨星カノープス

AUTHOR(S):

水野, 千里

CITATION:

水野, 千里. 巨星カノープス. 天界 1922, 2(23): 223-227

ISSUE DATE:

1922-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159795>

RIGHT:

岡山 水野千里

巨星カハーブスが見ゆる時が來た。この星は支那名を壽老人星又は老人ミ呼び、時として南極老人ミも稱せられ、南の地平線上濛氣の中にキラ／＼ミ輝いで居るのを見るミ、あがれて居る赤道方面に行つた感がある。

一、巨星と矮星

星は色によつて年齢を知ることを得るので、久しい前から青色が最も若くて白、黄、赤色であるといはれて居たが、近頃巨星といふのはグヨウの星で青色が最も若くて黄、白、青色は次第に熱度を増し、青色が頂點でそれから次第に熱度が減じ引締つて來るのを矮星といつて色は青、白、黄、赤色の順で、カノーブスの如きは巨星の青色で、太陽は矮星の黄色である

ニ、アルゴ船座

カノーブスはアルゴ船座星(首星)であるが、この星座には肉眼的星數百二十五(一等星一、二等星四、三等星十一、四等星十七、五等星九十二)もあつて大星座である。元來アルゴさいふのは船の名であるからラカイユは之を龍骨、帆檣、艫、羅針盤の五つに分けたが星の各個の名としては通じてバイエル名が今に使はれて居る。

今光度の等級により分けて見ると左の通りである。

譯	內	アルゴ船	星	
羅	龍		座	
爐	帆			
櫓	骨			
針				
羅				
		一	一等	光
		四	二等	度
		一一	三等	等
		一七	四等	級
		九二	五等	
		一二五	計	

三、神話

大昔にコルクス國といふ國があつた。これは現今ミングリ
リヤの地で北はシシヤ、東はコーカサス山、イベリア、南は

アーメニヤ、ボンタス、西は黒海に臨んで居て河川は多く黒海に注ぎ果實を多く産した國である。

最初埃及の兵士が其の將セストリアに率ひられて此の地に來て、その一隊が關所を守る爲めに此處に取り殘されて殖民市を建てたのが基で織物殊に麻布を多く産し、動植物の模様が巧で、その染色の褪せざるのが特色であつた。

西曆紀元前一二六八年頃イーチス王の時代に希臘のジェソンはアルゴ船に乗つて此の國を征し、金毛の楯を奪ひ取つたといふ物語がある。初め希臘のミニヤス族のアサマスの二子フリキサス、ヘレ饑饉の節犠牲に獻けられ已に神官の手で屠られんした時に一陣の旋風黒雲を捲いて吹き來り、雲中から金色の羊現はれ二子を乗せ何處までもなく消え去つてスレーヌ國までは何事もなく行つたが、其處で誤つて女兒ヘレを海中に落して死なせたので、その地をヘレスポントミ呼び、他の一子は黒海の東岸コルクス國に運ばれ其の國王イーチスの女カルシオーペを娶り右の金色の羊を犠牲として神に獻けイーチス王は其の毛皮を剥ぎ取つて之れを軍神アレスを祀つてある森の中の撫の木に懸けた。其の後フリキサスは病死しコ

ルクスの地に葬られた。その靈は故郷を慕つて希臘の國に行つてコルクス國に來て金色の羊皮を取り歸れわれはその羊毛に宿りて故國に歸るを告げたが、遠方の事であるから誰れもそれを取り來らんといふものはなかつた。時にフリキサスの従弟にイーソンと云ふものがあつたが、叔父ピリヤスにその國を奪はれ一子ジェソンを伴ひて北方に落ち行き途中でジェソンが一老婆を救けたがそれは女神ヘラであつた。後イオルカスの都に入り、神託によつてジェソンはこの地に王たるを知つたが王ピリヤスは數々の難題を申かけた、その中にコルクス國で遊いたフリキサスの靈が毎夜々々金色の羊毛を取り來よと夢に促すから、それを取つて來たならばこの國を譲るを約したので、ジェソンは造船に長ぜしアルゴスに命じて船を造らしめ、その名に因みてアルゴ船と命名し五十人の勇士を乗せ出陣しボスポラス海峡に進んだが、行手に二大巨岩があつて波の爲めに忽ち合し忽ち離れその間を通るこぎが出来ない様であつたから、試みに鳩を放ちしに僅かに尾を損ぜしのみであつた。そこで五十人のものは全力を盡して突進したら艫を僅かに損したのみで通過することを得その後は二大

巨岩動かすなつたこの事である。それから黒海の上は波靜かに事なくコルキス國に達し、王女ミヂヤの救けによつて金色の羊毛の楯を奪ひ取つて無事に歸國した。その間に歲月を経過したのでピリヤス王は老衰して盲目となり、父イーンも同じく盲目になつて死を待つ有様であつたが、ピリヤス王が約に反し國を譲らないのでミヂヤがピリヤス王を殺しジェソンの父イーンを若返らせジェソンをして國王になしたといふ神話にあるアルゴ船が星座の名になつたのである。

四、カノープス

カノープスの實體、位置等を調べて見る

1、光度 負〇、九等でシリウスの負一、六等に次ぎ、全天に於て第二位を占むるよく輝いで居る恒星で、その光量は太陽の五萬倍あるこのことだ。

2、距離と體積五百光年の遠距離にあつて、其の直径は太陽の約百三十倍であるから、體積は二百十九萬七千倍に相當し最も巨大なる恒星として知られて居たが、近年に至りベテルギューズの直径は太陽の三百倍で體積は二千七百萬倍

アンタレスは直径が太陽の四百七十倍、體積は約一億萬倍なることが判明したので今では第三位はなつたが、何分大なるもの一つである。

3、色スペクトルによると青味がかつた白色でF型に屬し、分光器的連星であつて、埃及ではシリウス同様昔から盛んに崇拜せられた星である。

4、位置 赤經六時二十二分、赤緯南五十二度三十八分に位して居るのでオリオン座に次いで大犬座、小犬座の現はるゝ頃にカノープスも見えるのである。岡山は北緯三十四度四十分にあるから、赤緯南五十五度二十分迄は見ることが出来るのでカノープスをば地平線上二度四十二分の高さに見るのである。京都天文臺は岡山より約二十二分北に位するので、カノープスの高さは二度二十分しかないわけである。ヴェガは赤經十八時三十四分、赤緯北三十八度四十一分だから略々カノープスの反對の位置にあるが、我が太陽系はヴェガの方に向つて進行しつゝあるのであるから、カノープスを次第に遠ざかりつゝあることになる。又今後一萬二千年でヴェガが北極星になるときはカノープスが南極

星となり南北兩極に一等星があつて壯觀を呈するのである

五、七 福 神

カノーブスは支那名を壽老人又は老人といつて七福神の一である世俗に福徳の神として崇敬せらるゝ七人の神仙を七福神といひ、時代によりては少しく其の神を異にして居るが吉祥天、辨財天、多聞天、大黒天、布袋和尚、福祿壽及び恵比須で或は吉祥天の代りに毘沙門天、多聞天の代りに狸々を入れ、現今は毘沙門天、辨財天、壽老人(吉祥天又は狸々)大黒天、布袋和尚、福祿壽、恵比須をいふのである、

七福神の信仰は古來弘く國民の間に行はれ幸福を守る神として福壽、財寶を祈り、或は七福神舟遊の圖を畫きて寶船と稱し、毎年一月二日の夜枕の下に敷きて吉夢を見んことを願ひ其の他彫刻、繪畫の材料としたり、詩歌に詠ぜらるゝ等、常に國民と密接なる關係を有し特に福祿壽は延命の神でも三南極老人星の化身である。短身、長頭、美髯豊かに杖頭に經卷を結び白鶴を伴つて居るが、杖頭の經卷は人の壽命を記した簿冊である。我が國で頭長きを福祿壽といふは止しからず

頭長きは實は壽老人なりと云ふのだが壽老人も延命の神で福祿壽と同星であるとの説で、その像は普通の老人の形で杖を携へて玄鹿を伴つて居るが、鹿と祿とは其の音相通するを以つて愛度きものとして添へ畫きたるものであらう。玄鹿は鹿の千五百歳を経たるものをいふので其の肉を食すれば二千歳の壽を受くといひ傳へられて鹿は長命の獸である。此の神も壽昌を司るから福神の中に入れられたのである。我が國では徳川氏の初代頃からもてはやされて居た事は明らかで、足利時代にも七福神の記事があるので國民の迷信を掌ることは久しいものだ昔から壽老人の現はるゝ歳は幸福の歳であるといふ迷信が信ぜられて居るのは打破せなければならぬ

六、カノーブスの南中

カノーブスは年によつて見え又は見ないのではない。毎年他の恒星と同様、同月同日同時刻には同一の處に見えるのだが何分赤緯南五十二度三十八に分あるから、北緯三十七度二十二分以北では絶對に見えないのみならず、それ以南の我が國の大部分や、支那の中央邊では地平線上に近いので、山

が邪魔したり、水蒸氣や雲の關係なごでよく見ぬないのだ、我が岡山では南方の兒島半島の連山あるも餘り高からず、雲も比較的少い時が多いから、十月以來翌年三月迄注意すれば晴れたる夜には屹度見ゆる。カノーブスの南中するのは略々左記の通りであるから、その前後約一時間都合二時間位は見ることが出来るので、迷信とはいひながらこの壽老人星を眺め幸福を受けられると思へば體り悪い氣持もせないのだ。

十月一日午前六時、十月十六日午前五時、十一月一日午前四時、十一月十六日午前三時、十二月一日午前二時、十二月十六日午前一時、一月一日午前〇時、一月十六日午後十一時、二月一日午後十時、二月十六日午後九時、三月一日午後八時、三月十六日午後七時。

ざつと半々年間は毎日見える譯で十一月から十二月迄は午前一月から三月迄は午後に注意して見るに南の地平線近くに燦爛たる一等星は外にはないのであるから十分にその美觀を味はれると同時に天文學上研究すべき點の多きこの星を興味を以て迎へられんことを切望するのである。

(一九三二、一〇、一)

詩人の生活に於ける天文學(二)

A・D・ワットソン
T・E・生 譯 註

凡ての人類の中で詩人は其生活の凡ての行路に『かくて我等は星々に達するなり』との題目を掲げる。彼は凡ての花の中に永遠的の美を洞察し、凡ての星の中に宇宙的法則を觀取するのである。彼にまつては『十二宮がその時にしたがつて』出で来る(譯者註舊約聖書百約記三十八章二十二節)事はかの秩序の表現であつて、それに従ひ、又それに據つて凡ての遊星も、凡ての彗も其の軌道を保つものである。何となれば詩人は其言葉が意味する様に創作者である。概念を再び合して新しい觀念を作る構想力は詩人の創作的能力である。それにより彼は新しい構成と意味とを喚起する。彼等は少數の事物に忠實であつたが爲めに多數の事物を支配せしめられたかの靈魂に従つて實在の公道に進み入る。

萬人は一定の影響の範圍、活動の舞臺、能力の區域を持つ